

俺【我愛羅】ってんの、
宜しくね☆

八又ノ大蛇

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

全く自分に関することが思い出せない男が我愛君に成り変わった。でも他の事は覚えておりここがNARUTOの世界であることに気づき、男は逆転王道主人公コースを目指しーいさない。

暗部？ー良いじゃん。殺されそうになったんだら殺して何が悪い。

尾獣？ー守鶴さんは俺にとって唯一の話し相手。

父様？ー知らんがな。

諦め投げやり上等！そんな主人公が歩むそれなり忍者ライフ！

目次

| | | |
|------------------|---|----|
| 一塵く成り変わりは我愛羅く | — | 1 |
| 二塵く班決めは先生の匙加減く | — | 11 |
| 三塵くお月様は砂煙に隠れるく | — | 20 |
| 四塵く休日、ボッチは実践訓練中く | | |
| 29 | | |
| 五塵く守鶴心、我知らずく | — | 38 |

一塵く成り変わりには我愛羅く

薄ぼんやりしたした視界が晴れると俺は、な、な、な、なんと！NARUTOの我愛羅くんに成っていたのです！まあ、驚いた驚いた。

最初はえっ？ナニコレ状態でした。前世では平凡な………何だっけ？ぼやっとしてハッキリとは思いつけ出せないけど、多分男だったと思う。うん、駄目だどんな仕事についてたのか何歳だったのかも分からない。

ただ、こんな砂に囲まれた砂漠の中に築いたような場所は前世でも無かった。知らないだけかもしれないが、見たことが無かった。並び立つ高層ビル、土のない補整された道路、少なくともこんな砂だらけの所には住んでいなかった。

そして何より人が屋根の上をピョンピョン飛び回る光景は絶体見たことない。初めて見たときはどんな身体能力してんだよ、って思ったね。でもやってみれば何故か案外普通に出来る自分に驚いた。あと何より自分の容姿に驚いた。わあ、驚いてばかりだあ。

でも仕方ないよね。だって我愛羅くんですよ？あの初期グレグレ反抗期感が半端なかった我愛羅くんですよ？そりゃあ、驚きますわ。

もう驚きすぎて勢い余って砂で壁に穴開けちゃいました。直ぐに監視役の忍が飛んできたよ。ゴメンね。

でもさあ、冷静になつて思うんだけど俺どうしよつか？

ぼくはがらくん、ことし6さいになりました。たまにコワイゝ”あんぶ”のひとがぼくを殺しにきます。

夜叉丸の死亡から感情を抑えきれないで暴走しちゃつて父様の命令を請けた暗部に暗殺されかけています。暗部つてのは”暗殺戦術特殊部隊”のことね。主に汚れ仕事を請け負う里の裏方で精鋭揃い。そんな人らに我愛羅くん狙われている訳よ。

ねえ、どうすりゃいいわけ？記憶が戻ったのが処分判断された後6歳。処分判断される前なら道は色々あつただろうけど、された後つてどうすればいいの。無理じゃん、ベリベリハードコース直行じゃん。そこから逆転王道主人公コースには流石にナルトくんぐらいのダイヤモンドのメンタルがないと無理だつて。

俺？あるわけないじゃない。そもそも暗殺にきた暗殺の方々をコロコロしちゃつてなんか、もうどうでもいっかなあ。になつている。殺らねば殺られるの状態で捕獲するなんつて甘つたるい選択肢は皆無。練乳と蜂蜜入りのミルクに砂糖を入れてもまだ

足りないぐらい甘い。

何で殺されかけてつんのに殺す相手の心配しないといけないの？ぼくわからない。

原作の方でも殺りにきた相手を我愛羅くんバンバン殺していたみたいだし問題なくねえ？

それとさ、ご都合設定なんだろうけど……暗部殺せるぐらいの我愛羅くんがなんで、中忍試験でたかが下忍に苦戦させられているの？あれずつと謎だったんだけど。

下忍が暗部より強かったと仮定しても可笑しいよ。原作の描写じゃ我愛羅くん複数対一人で勝ちを納めているんだから、下忍一人この場合はサスケね、に追い込まれるのは可笑しいじゃん？

……まあ、いいやあ。もう考えるの面倒だ。「人間は考える葦である」と偉人が言ったらしいが知るか。時には思考の停滞もとい「現実逃避」も必要だろう。

そんな訳で……

『守鶴さん暇です』

『……………』

『守鶴さん〜』

『……………』

『守鶴たん〜』

『うるせえよ!!』

『寝てんだよ、邪魔すんな!!』と怒鳴る我愛羅くん。封印された守鶴さん。原作だと疎ましい存在しているけど友達じゃないの我愛羅くんには唯一の話し相手。彼?のせいで我愛羅くんは不眠病になってたみたいで寝れない為にできた限が凄い。寝た瞬間に乗つとるぞで恐怖で寝れない我愛羅くん。

ヤバイねえー。ん?どうしたって?寝ましたよ。

二日ぐらい頑張つてみたけど無理。マジ眠い。もう暴走してもいいかなあの自棄で寝てやると、何故か乗つ取られることは無かった。これには俺クエスチョンマーク。

それから俺的に考えた答えは、寝ると乗つ取られるではなく寝れないという不安や恐怖からフラつく精神の隙間に入り込み乗つとるのではないかと思う。我愛羅くんなんか精神不安定だったし。可能性がないわけではないと思う。

まあ、正確にはわかんないけど。でも寝れるならいつか、って感じ。何でかこの体寝ても寝ても眠気が消えてくれない。隙あらばお寝んね。あれかね、今まで寝れなかった分のツケが回ってきた的な?

俺自身寝ることが嫌いではなく大好きだし、遊べる友達もいない。寝る子は育つ、いいじゃんドンドン寝よう。

でもさあ、寝過ぎても暇。

『守鶴さあくん、暇あ〜』

『知るか!』

『「しりとり」しようよ〜』

『一人でやってろ!俺様は寝てえの!』

『守鶴さんのケチ』

『第一人柱力が俺様に気軽に話しかけんじゃねえ!俺様は人間が大嫌いなんだよ!』

『じゃあ、俺からね。「しりとり」のりだから「りんご」』

『勝手に始めんじゃねえー!!』

まったく守鶴さんはツンツンだなあ。でもなんだかんだ言いながらしりとり暇潰しに付き合ってくれる守鶴さん優しい〜!多分暇なんだろうね。だって彼寝ること以外することないだろうし。そりや外に出たいわな。

俺は普段勉強とか術の修行とかしてる。勉強結構ムズいけど他にすることないからしてると本来アカデミーで教わること終わっちゃた。

元から我愛羅くん頭良かったのもあると思う、だって臨の書にサクラまではいかないもサスケよりは良かったと書いてあったし。覚えるの早いし理解も早いよこの頭。

するとだいたい術の修行になるんだけど、正直これは暗部の先生方と殺りあった方が熟練度が上がると思う。ほらゲームの敵を倒したら経験値ゲットのな?想像するより現

物と殺った方が早い。

なのでやるのが幻術か体術にシフトチェンジ。幻術と言えば打倒うちは・サスケ、体術ならロック・リーを指しております。

幻術はまあまあだけど我愛羅くん体術駄目だね。成長途中なのもあるけど根本的に力が弱い、臨の書にも唯一女と同じぐらいと書かれていたよ。なので回避に主点を置くことにした。下手な鉄砲数打ちや当たるじゃないけど、攻撃は砂でやった方が何倍も強い。防御も砂でなので棒立ちになる。

これ当たらなければカッコいいけど、油断して当たるとめっちゃカッコ悪い。なので体術頑張って逝こうー！あつ、間違えた。

頑張って行こうー！

『トカゲ』

『ゲ……激怒ポンポン丸』

『……はあ!?何それ!』

ぼくはがらくん、ぼくはきようは”あかでみー”にはいますー。

はいつ！とやつて参りました！

右手に見えますは子供たちの学舎砂隠れのアカデミーになります。子供が少ない砂隠れでありますがここにはたくさんの子供達がおり和気あいあいと和やかな雰囲気にも包まれております。そんな中にいます私こと我愛羅はととても居心地が悪いのですよ。はい。

「……………」

意味わかんねえー、ナニコレふざけんなし。俺から分かりやすく一定の距離を保つ止めろ。マジで傷つくから。俺泣いちやうよ？

チラツと近くの（三メートル離れた）子に目を向けると顔を青ざめて他の子の所に走っていった。……………。いいもん…………俺には守鶴たんがいるもん。一人じゃないもん。おい、あれポツチ乙とか聞こえたような…………いや、俺に話しかけてくれるヤツはいない。

いいんだよ？そう言つても。だからそんなに離れないで、俺のガラスのハートが粉々

に粉碎するから。

『もう一度融解して直ぐに再生するだろ』

『しないもん、砕けたまたまただもん！』

『ああ、それで回りを傷つけるんだな』

『ちゃんとチリトリであつめるもん！』

『一人だな』

『そう言うのヤメテ！私のライフはもうゼロよ！』

一人ちやうもん、守鶴たんいるもん。『俺様を含むのは止めろ』とかぼく聞こえないもん。

はい、と言うわけで俺が長々と守鶴さん脳内会話をしていると風影様の話は終わりました。本当父様鬼畜いよね。俺の方を睨んでから退場していったよ。熱い視線とはこの事だろうか？熱過ぎて逆に背中がヒヤツとしたよ。

眠気眼で話聞いてたから？それとも昨日暗部の方々を三途の川を渡る船に乗せたせいでだろうか？多分後者かな？

まあいいや、今日から俺の忍者アカデミーの開幕だからね。人間第一印象が肝心ここは完璧な自己紹介で皆の視線を集めてクラス一位……………は百パーセント無理だから友達一人は作りたい！

頑張るぞ〜！

「我愛羅だ……」

「はい、じゃあ次の人」

はい、コミュ症乙自分。

分かってたよ。分かってたんだ。そうだよ、無口なんだよ。必要最低限の事しか我愛羅くん喋らないんだよ。砂とか出来のいい頭脳を受け継いだら無口も受け継ぐのね。

要らん！

黒板前に立った瞬間、頭の中に何回も繰り返した紹介文が真つ白の生地に早変わり。もう名前言うのが精一杯です。えっ、何で？我愛羅くん別に恥ずかしがりやという訳ではなかったと思うけど……。消去法に従って導き出す答えはー俺か……。

俺って緊張に弱かったんだね、初めて知ったよ。普段誰とも喋らないから全然知らなかった。

無口プラス緊張に弱いこれが掛け合った結果、名前だけ。

「……………帰りたい……………」

机にうつ伏せになり静かに声が口から漏れた。それとついでとばかりに目から水が溢れそうになった。

二塵く班決めは先生の匙加減く

一日目はクラスに集まって自己紹介をして終わった。して今日から本格的に授業開始である。さあ、ここでアカデミーの入学条件を確認してみよう！

- 一、里を愛し、その平和と繁栄に尽力する志のある者であること
 - 二、不撓不屈の精神を有し、たゆまぬ努力と鍛練を行う者であること
 - 三、心身ともに健全であること。以上三つをもつて入学条件とする。
- どこの軍人学校だよ！ってツツコミたい。

これを真にクリアしている者がいるならソイツもう学校通う必要があるのだろうか？自身で勝手に強くなる気がする。でもまあ、創立されたのが戦乱の世で戦力確保と教養が求められればこうなるような。でもさ、厳しすぎない？それとも文が固くてそんな印象を受けるだろうか？

まあいいか……拙者にも不撓不屈のダイヤモンドメンタルが欲しいでござる。それがあれば、この愉快な笑い声が少しはましに聞こえるでござろう。

「あつ、今コッチ見なかった……？」

「えっ、ヤダ怖い」

「なんでここにいるんだろう?」

「しー、……もし聞こえたら殺されちゃうわよ」

「もつと、向こうに行こう……」

やーだ、やーだ、ぼくお家に帰りたい。聞こえとるわ、耳いいんだよ。そういう話
はもつと隅でやるか本人のいない所でしてくれ。心にグサグサ杭が刺さる。

「……はあ」

自然とため息が出る。今日から学校だと言うのに何故初日からこんなにも憂鬱な気
分にならねばならないのだろう。人の楽しそうな笑い声は俺には不協和音に聞こえる。

へーイー!今日のBGMは「クラスメイトの笑い声」だ!つてか?

そんなクソみたいな曲がラジオから流れた日には俺は機械ごと粉々に潰して火葬し
てやるわ。ナルトならどうするんだろう?……駄目だ駄目だ。「サボる」の文字が
脳内を埋め尽くす。

しかし彼は本当どうしていたんだろ?キツくないか?俺は既に泣きたいです。女子
のヒソヒソ話の効果は確実に俺を蝕んでいる。ねえ?君達もつとポリユーム下げてく
らないかね?

「はい、皆席についてー」

チャイムが鳴り入ってくる教師の先生がそう言うと言つて皆席につき出す。おお、神よ！ただ仕事をしただけだろうけど、俺には地獄に仏に見えるよ！

しかし、そんな俺のピュアな想いは先生の次の発言で玉砕するのだ。

「二時間目は交流を深めるため、5人組の班を作つて活動してもらうからな」

”5人組”……5……人組……。

その言葉は言つてはいけない呪文だ。子供の少ない砂隠れのアカデミーのクラス人数は二十四人。このことが、どういうことか分かるか諸君。

一つは四人組の班が出来ると言うことだ。

まず、仲の良い活発的な集団ができ、顔見知りらが集団を作る、そして友達伝いで集団が構成され、知り合いがないものは適当に回りのやつらと集団になる。

そうすると、残るのは人数の都合上比較的立場の弱いハブられたヤツ、知り合いもおらず誰も声をかけてくれなかったヤツ、言動や行動に問題があるヤツ、そして知り合いもおらず関わりたくないと思われる”俺”である。

オワツタ。

「……そつ、その……よろしくお願いします……」

「……なんで僕が……こんな班に」

「ああ？聞こえねえなあ？声ちいせんだよ！」

「……………」

小柄で気弱そうな青髪の少女、眼鏡をかけた頭固そうな黒髪少年、声と身長もデカイ暴力そうな茶髪の少年。そこに里の嫌われもの赤髪少年我愛羅くん。

ねえ！この班駄目だと誰が見ても分かるんだけど！

つてか、俺少女にすら身長負けてねえーか!?どんだけチビなんだよ！

「おつ、出来たな。じゃあ演習場に行くぞ」

なんでも、個々の实力を見るために班対向で模擬戦だと。無理無理だつて、一人かけている班は対向する班を一人減らすと言つても無理だつて。この班絶対連携プレーと出来ないよ。作戦たてても失敗する未来しか想像できない。

いや、別に自惚れじゃないけど俺一人なら勝つこと自体は容易いと思う。なんとつて皆が友達と遊んでいる時間全て勉強や術の修行をしてたからね我愛羅くん。それぐらしかやることないし。必然的に強くなる。

砂のコントロール出来ないと感情が苛立っただけで人グツチョンしちゃうからね。

ただなあ……いきなり前に出たりされると味方だろうと関係なく攻撃してしまうかもしれない。そうなると俺の学校の居場所は消え失せるだろう。

でも最近技術を始めたばかりでとてもじゃないが実践で使えるものではない。なので砂で攻撃するしか方法が今のところないのだ。

せんせーのせつめいをきいて”もぎせん”がはじまりました。ぼくのはんはさいごなのでいまはまっています。

うおああああ!!どうしよう!他の班はそれぞれ意見を言いながら作戦を練っているけど、俺の班は無言!誰一人として喋らない!気まずいの一言である。

不幸中の幸だろうか、順番は最後なので考える時間はある。けど、だれも話さない。

勇気を出して俺から話かけても良いが、誰も相手にしてくれないのが火を見るより明らかだ。更にこの沈黙が強化されるだろう。

「あ、あの……どうしますか?」

おお!大人しそうな少女が発言した。凄いぞ!この痛い雰囲気で話せるのは。これに乗らない手はないな。

「そうですね、とにかく先ずは自己紹介をするのが最善だと思われます」

「うん、そうだね」

眼鏡よくやった！この二人は知的な感じたな。

「じゃあ、僕から。僕は【キルルク】忍術の知識はそれなりがあると自負しています。忍術は土が少し使えます」

「わ、私は【シズサ】傷の担当が得意……かな？ごめんない、体術も忍術も苦手なの……」

忍術の知識ってどのぐらいなんだろう？子供の知識だからそんなに期待しない方がいいな。傷の担当では……うん、大事だよな。俺殆どの攻撃は砂が防いでくれるから傷をおったこと無いけど。あつ、自分で傷つけたのはノーカンね。

「へっ、大したことねえなあ！俺は【ゴウゲン】だ！体術は親父に鍛えてもらったからな！忍術は雷が使える！お前から俺に従えよ！」

負ける筈ねえー！感が半端ないゴウゲン。うん、自信はあった方が良いよね。ただ威圧的な人は俺苦手だなあ。いやまあ、命令してくれのは責任を負わなくて済むから楽でいいけど無茶な命令は止めて欲しく思う。

ん、最後は俺か。

【我愛羅】だ………砂を使う」

どうよ！頑張ったよ！名前だけじゃなくちゃんと他の事も言えた！なのに何で皆俺の方を見てるの？終わったよ？注目されるの嫌なんだけど。

なに、そんなに俺が喋ったら可笑しいの？

「へ、へっん！なんだ化け物だつて聞いていたがこんなチビかよ！」

「……ああ？」

「フッン！お前みたいなチビが睨んだつて怖かねえだよ！」

なんだコイツ……。分かりやすく頭に乗ってる俺の嫌いなタイプの餓鬼だ。チビつて二回も言いやがった。許すマジ刑だ。俺は確かにチビだろう、それは認める。だが、自分で認めていても他人にそう言われるのは腹が立つ。

しかし、俺はそんな挑発に乗るほど短気ではないのだよ、ゴウゲン少年。

「……何が言いたい」

「お前より先に相手の班をやっつけてやる！」

「……そうか」

「俺が勝つたらお前は俺の下だからな！」

……意味がわかんねえだが。そもそも、これ班での模擬戦だろ？なんでチーム同士で争わにやいかんのだ。馬鹿か？脳筋か？

それと、自分が勝つこと前提で話されるのはなんだかムカつく。

「……俺が勝つたらどうなる？」

「ああ!?ねえよ！俺が勝つんだ！けど、そうだな！俺が万が一にでも負けたらお前の命

令聞いてやる！だから、俺が勝ったらお前俺の命令に従えよ！」

無茶苦茶だ。脳にウジ虫でも沸いてっんじやねえか、この餓鬼。俺がその提案に乗る理由が全く無いのだが。命令したい事もないし。

『友達になつて、て命令すりゃあいいんじやねえーか？』

『はっ……？』

『なーんてっ』

『……そ、そうか！そうだな！』

『えっ？』

『いいな！それ！』

友達！こんな所でその可能性に出会うとは！アカデミーに来たときは早々に降りた
いと思っていたが、幸運だ！

ほら、いつもは仮面のように殆ど動かない顔の筋肉が嬉しそうに自然に持ち上がる。
きつと今俺はいい笑顔をしているだろう。

「……いいぞ、受けてやる」

「は、はっ！上等だ！」

ああ！楽しみでしかたない！

こんな機会はそう無いだろう。速攻で有無を言わさず決めてやろう！

三塵くお月様は砂煙に隠れるく

はい、俺達の班に順番が回って参りました。

相手の班は前に三人後ろに一人の配置で、こちらは前二人後ろ二人だ。まあ、こっちは配置とかでなくただ単純に班活動だと言うのにチーム内で競いあう馬鹿な二人が前に出ただけだけだね。

「キルルクくん……これで大丈夫かなあ……？」

「大丈夫なわけじゃないでしょう。……でも貴女あの二人に反論出来るとおもいますか？」
「うっう……ごめんなさい」

ゴメン！本当ゴメン！そうだよね！

馬鹿な二人ことゴウゲン少年と私我愛羅でございます。本当俺の馬鹿！たかがガキの挑発に乗っちゃうなんつて！二人に迷惑かけまくりじゃん。

けど、男には譲れないものが時にはあるのだ。学校生活において”友達”は最重要項目の一覧に名を列ねる。この機会を逃せば俺の友達作りはより困難を極めるだろう。舞い降りた千載一遇のチャンスを逃さばおくべきか、である。

「では、模擬戦開始！」

よし、ゴウゲン君が前に出るより先に攻撃しないと。巻き込むおそれがあるから、速攻で砂を対戦相手の地面一面に流動させる。

「……捕獲」

砂に驚き逃げようとする生徒達の足に砂を纏わせる。一度捕らえられれば蟻地獄のようにズルズルと砂に引き込む。まあ、引き込むといつても埋めるわけじゃなくて砂を対戦相手の顔を残して体の全ての身動きをとれないように捕縛する。

けど砂が生徒をジワジワと侵食していく様子は砂に飲み込まれてくいだ。

「うっああああー!!?」

「キヤアアアー!!?」

「いやあだあー!!?」

「ママアアアー!!?」

……あれ?これヤバくない?なんか絵面が完璧アウト感があるんだけど。つてか悲鳴がマジもんなのだが。涙と鼻水を恥ずかしげもなく垂らし叫び声を上げる生徒達。

それを静かに一切の感情の読み取れない鉄仮面で見る我愛羅くん……。

アウトオオオオー!!

やべえ、やり方間違えた。横のゴウゲンくんは俺をありえないものを見るような表情

で見てるし、後ろの二人はアオサさんがキルルクくんにガタガタ震えながら抱きついて
いる。そして先生までもがその光景に顔を青ざめている。

「そ、そこまで！試合終了！」

狼狽えなが先生が止めにはいる。

試合の勝敗は一応、俺達の勝ちと言うことになった。う、うん。やったあ……勝つ
たよ……わああい………何故だろう全然嬉しくないどころか、虚しい。試合前
より生徒と先生達と距離が空いたように思える。対戦相手達からはまるで人殺しの様
な目で見られるし。

解せぬ。俺、頑張ったんだよ？誰か褒めてくれてもいいんじゃないかなあ？

「……ゴウゲン」

「ひっ、なっなんだよ……！」

「……約束」

「えっ!?……ああああああ!!」

腰を抜かして震えるゴウゲン君。なにそれ、演技凄い。えっ、演技じゃない？

「何でも言うこと聞くから、殺さないで……!!」

「……友達」

「……はっあ!!」

「……俺と……友達になれ」

「あ、ああ……?」

ヨシャアー!!友達ゲットだぜ!何より、友達と言えた俺偉い!言うのメチャクチャ
恥ずかしかった。いやあ、嬉しいなあ。

「ヒッイ!!?」

おっと、思わず頬が緩んでしまった。

時刻は移り、爛々と輝くお月様が頭上に浮かび、砂漠の中に存在するため昼と夜の温度差の激しい外気が冷え込む。昼間の活気は失せ、歩く人の姿も疎らになった穏やかな宵の刻。

良い子は温か布団に包まれてスヤスヤお寝んねするのが、子供らしいだろう。出来れば俺もそうしたいと刹那に思うよ。

「クソッ!」

「このッ、化け物が!」

「退け、体制を整えろ!」

だがそう出来ないのが世の不条理だろうか。

こわーい、あんぶのひとに××されそうなの。ぼくがあらくんです。あるいていたら、クナイをなげられてぼくはとつてもこまっています。ひとにめいわくこういはだめだよ。

はい、クナイに起爆札が付いていた事はこの際些細なこと、若しくはよくある事だよ。月が綺麗だなあと屋根を歩いていたら、やあ、殺しに来たよと覆面集団。

まあ、何か嫌な気配を感じて人通りの少ない所に行くと案の定、襲われたと言う訳だよ奥さん。

もうー、我愛羅くんモテモテだね!アカデミーでは虫も寄り付かない程、引きに引いているのに。来るわ来るわ、暗部さん達。

「……砂針」

君達、そんなに暇なのかね?と問いたいね。

「ぐっあ!」

「足が……!」

地面に暗部の人達が降りたところを狙い、瞬時に地面の砂を針状にする。何人かは逃

れたが、回避が遅れた者は足をぐっさりとは砂針が刺さる。

そして足を刺されバランスを崩し前や後に倒れようものなら、自身の体重と倒れた勢いで針が体を貫く。

仮に何とか健気に持ち堪えても、俺はその隙をみすみす見逃してあげるほど、お優しいのではないのね。地面から生える砂針を更に伸ばし、約人一人分に長くし足元から串刺しにする。

すれば、あらまあともじやないが、お見せできないモザイク処置必須である。

「……何故、俺を殺そうとする？」

「つ、そんなの決まっている！貴様が里を脅かす化け物だからだ!!」

「化け物……か……」

「ああ、そうだ！分かったなら、大人しく里の為に死ね!!」

捕縛した暗部の方を、可愛く上目使いで質問してみたら予想通りの答えが返ってきた。罵倒するのはどうでも良いけどさ、捻りが無いよね。

毎回毎回、化け物化け物、死ね死ね、殺す殺す。

呪文か何かなのか？それを言えば目的が達成できるのかな？何それ、願掛け？それも、そう言えと命令されている……とも、考えたがこれとても演技には見えない。

寧ろ、これが演技なら忍の道から足を洗って、是非とも役者を目指して頂きたい。

「——ッ、風影様申し訳ありません！」

焦げ臭い臭いがすると思えば、砂を吹き飛ばし爆発が起きた。油断なく用心していたので砂で防げたが、爆発の後には砂煙が舞い、地面には焦げた痕跡ができ。そして人間だったモノの肉片が辺りに飛び散っている。

「……………」

なんだこの死に方は、当て付けか何かか？夜叉丸も最後に起爆札を使い俺を巻き込もうとして死んだ。

皆、起爆札大好きか！まあ、防げる攻撃をしてくれるから俺的はありがたいがね。

しかし、これを見ても特に感情が動かないのが我ながら結構ヤバイんじゃないだろうかと、考える。記憶が無い無いだから、前世の俺がどんなヤツだったの分からないし、知りようもない。

けど、もつとこう……込み上げる吐き気とか、罪悪感に苛まれる精神とか、暗部に対する憎しみとか、その他纏めた激情とか。そりゃあ、殺されかけたら寂しいし、止めて欲し、父様鬼畜いとは思うし、里の皆の態度も痛いし……………けど、わりと”それだけ”なんだよね。

恨み憎しみに囚われて、里の全員に復讐してやるとは思わない。何もかもに絶望して、命を絶ちたいとも思わない。

自分の精神が異常なのは何となく察するけど、それが何？って感じだね。精神が凡凡の凡人だから、俺を取り巻く環境を端から見ているような気分なんだよね。殺したのは俺だし、その感触も確り手に染み込んでいる。見た風景も惨劇を作り出したのも俺だ。

だが、頑張りたくない、出来れば可能な限り楽をしたい、怠惰に生きたい。それが俺だ。

全くもって、無気力人間。俺が我愛羅くんで良いのだろうか？合って無さすぎて笑えてくる。けどね、死ぬ気は今の所これまた、無い無いなんだよ。

だから——死んでくれ。

『とか、昨日カッコつけていたが、起きろよ』

「俺にあるのはただの闇それだけだ……」

『まだ二日目だぞ』

「くツ、昨日の戦闘での傷が！」

『嘘つけ、傷一つ無いだろ』

守鶴が何か言ってくるが、俺には何も聞こえない。何故なら俺はいつも独りだからだ。孤独な俺に他者から与えられる癒しなどない。故に、耳の痛い言葉は聞こえないから、聞こえない。

だが、今の俺の心の叫びを言おう。

「アカデミー行きたくない！」

『駄々っ子か！』

ああ、行きたくない。砂分身で……駄目だ。即バレする未来しか見えない。

四塵く休日、ボツチは実践訓練中く

雲一つない快晴、鳥は空を悠々と飛び、子供が元気に廊下を駆けては先生方に怒られる。

そんな清々しき朝、皆様おはようございます。今日も最高にテンション駄々下がりの、表情筋が仕事をしない我愛羅くんです。

人に会えば先ずは挨拶から、基本ですよ。

「……………」

はい、その基本が出来ない私なのでございます。

人がいない訳では無く、ただ単に俺のこの口が動いてくれないのだよ！それに挨拶をしようとも何故か、凄く避けられてする暇がない。

おお、神よ、私に試練を与えすぎではないか？いいんだよ、もうちよと減らしても。過度な試練の与え過ぎは精神に深刻なダメージを負わせますよ。

要するに試練よ、廃業しろ。

と、何時もならアカデミーに行けば思うところだが、今日は素晴らしきかな、休日

ある！

嫌な目で見てくる先生も、俺の心のゲージを確実に削っていく女子も、何故か目が会う度にヒイツと独特の言葉を発する友人のゴウゲン君もいない。

本当何で？俺、ゴウゲン君に悪いことしたかなあ？今度、友情の証として何か贈ろう。きつと仲良くなる筈だ。兵糧丸じゃありきたりだし……皆があげる物じゃ印象に残らない……。

俺の自作の、起爆札……毒煙玉……貴重な毒草とかどうだろう？

まあ、それはそれと置いて今日は修行である。毎日やっている体術強化、独り組手に独り筋トレに加え術の研究をする。

俺の攻撃手段と言えば、”砂”。アニメオ리지ナルで武器の指南とか、体術を教わっている場面があったが全てナルトに会って性格が改変した後だ。それに漫画じゃ一回も我愛羅くんが砂以外の攻撃をした事はない。まあ、そんだけ砂が強いつて事何だろうけど、なんか味気ないよね。

砂と思わせて、実はくっつ的なヤツやってみたい。で、俺が砂以外の武器で考えて思ってた事は、砂系なら大体いけるんじゃないやねえ？と言う疑問だ。前風影の砂鉄、現風影こと父様の砂金。

我愛羅くんが普段瓢箪に入れている砂は自身のチャクラを練り込んで操る為、そこい

らの砂を使うよりも早く操作できる。慣れた武器は使いやすいやつた感じだ。それで俺が思ったのは砂と同じように砂鉄や砂金にチャクラを流し込めば操れるのではないか？だ。

結果、「そんなに人生甘くない」である。

動かすことは出来たが、とてもじゃないが実戦では使えない。俺自身が慣れてないのもあるが、メツチャ重いし遅いのだ。

だが、結構さつさと解決策は思い付いた。普段流し込んでいる倍のチャクラを練り込めば実戦で使える速さになる。

ただ、チャクラをかなり消費するから、人柱力であるチャクラの多い俺じゃないと直ぐに枯渇する。あと、そこら辺にある砂と違って砂鉄とか砂金は地中を掘り進めて探さないと見つからない。

敵と戦闘しながらそれをするのは、大分疲れる。なのであまりやりたくない為、戦闘中の補給は見込めない。そうまでして、砂鉄と砂金を使うよりも質より量の砂の方が便利だ。

しかし、ロマンには逆らえないのが男しての悲しいさだ。少量であれば問題なく扱える、なら使おう！砂金は正直、金銭としての価値しかあまり見出だせないから一先ず無視するとして。砂鉄は硬度も攻撃力も砂より高いし、絶対戦力増加になる。

前風影のように大量に砂鉄の大盤振る舞いは出来ないが、クナイや刀等の武器の形状にすることは出来る。元が砂鉄だからどうやっても真つ黒だが、形を自在に変えられる武器だと思えば中々に良いのではないだろうか。

砂でもやろうと思えば出来るが、砂は攻撃を吸収するのに向いている。何より刀一本分ぐらいならチャクラも殆ど使わない、俺に優しい低燃費だ。

けど、実際に使ってみないと性能は分からない。

「と、言うわけで——いざ実践！カモン、守鶴たん」

『守鶴たん言うなア！気色悪い！』

俺の砂分身に意思だけ憑依した守鶴との実践練習開始である。

ん？守鶴に乗っ取られてる？違う違う、守鶴たんが俺に乗っ取れる事が出来るなら、俺が意識して分身体の体をあけ渡せば操れるんじゃないか、と思ってる。案の定、可能でした。

わーい、これで俺独りぼっちじゃないよ！そこかよ、等の意見はお受けしておりません。だって寂しいじゃん！そりゃあ、声は聞こえるけど会って話したいじゃん！

けど、自分の姿で守鶴たんの口調はなんか……いや、決して……守鶴が嫌な訳では無いよ？けどさあ、ほらキャラってあるしさあ……我愛羅くんは大声で怒鳴ったりしないし……。私にも色々あんのよ……わかっておくれやす……。

そんな超絶個人的な意見で、守鶴は別の姿をとってもらっている。

薄金から毛先にかけて黄金色の髪に、縦にバツテンが入ったお月様の様な瞳に本来白目の部分が黒く染まった目。我愛羅くん同様に白い肌をした同じ背丈の目付きの悪い少年が立っている。はい、こちら守鶴たんでございます。

えっ？女の子じゃないのか？何言ってるの？ベースは我愛羅くんだよ。もう、やつだなあー美少女のわけないじゃん。現実はそのなりに希望に満ちてないんだよ、知ってた？『おい、俺様はお前のお遊びに付き合ってる義理なんつてねえーぞー！』

「まあまあまあ、そう言わないで。後で何か好きモノ作ってあげるから」
『……ほ、本当だろうなア……嘘吐けばその口切り裂くぞ』

「本当本当、マジマジだよ」

夜叉丸がいなくなつて本格的に絶賛独り暮らしだから、家事洗濯料理等の女子力が鰻登りです。それにより、守鶴たんの扱いがどんどん楽になっていくから、悪いことではない。

『しゃーねえ、めんどくせえがこの俺様が相手してやる。感謝しろよ』

「はい、ありがとうございます。守鶴たん」

『つ………、だからその「たん」止めるつってんだろ！耳にクソでも詰まってるのかア！?』

「えー、可愛いのに……」

真面目にお礼を言ったら、守鶴が一瞬固まってから怒鳴りだした。相変わらず短気だなあ。

それでも、俺の修行の相手をしてくれる守鶴はマジ感謝してもしきれない。それと、「たん」は付けた方が親しみやすく成るかと思っただからなんだが……馬鹿騒ぎしてるみたいで楽しいから、もう暫く「たん」呼びさせて貰おう。

『もう、うぜえ!』

「わっ、不意討ちは卑怯じゃないかあ」

『知るか!!』

地面から伸びる砂の手から逃れる為に空中に跳べば、手裏剣を模様した砂手裏剣が俺を襲う。それを砂鉄できたクナイで弾き、着地すると同時に襲いかかってくる砂に、クナイに起爆札を付け投げる。

そんなモノが砂に効く訳がなく、直ぐにまた攻撃が来るが動きを一瞬止められれば十分。普通なら後退する所だが、中距離から遠距離を得意とする砂相手にそれは愚策だ。水遁や雷遁が扱えればそれでもいいが、生憎俺の性質は風と土なので無理。なら、近づいて接近戦に持ち込むしかない。

起爆札の爆発により起きた煙に紛れ、守鶴に一気に距離を詰める。勿論、そう易々と

近づかせてくれる訳がなく、地面が砂針と化す。針坪マツサージと言うが、これはそんなレベルじゃない。

だが、足を止めれば守鶴攻略は不可能。どうする……………あつ、纏わせればいいんだ。

「砂鉄を足に……」

毎日履いている忍の靴で踏めば間違いない、足が！足が！になる。なら、砂鉄を靴に纏わせば——あら不思議、砂針の上も痛くありません。

ちよと重いけど、普段背負っているあのくそでかくて重たい瓢箪に比べれば全然軽い。

とつ、チャクラで足を強化し地面を蹴る。その勢いそのまま俺の周りをフワフワ浮遊している砂鉄を刀状に変形させ、思いっきり振りかぶる。

が、ザツと砂の盾でガードされ守鶴には届かず、空中で停止した所を吹き飛ばされ再び距離をとられる。

「んー、かったいなあ……」

『なんだ、もう止めるのか？』

「いっつんや、もうちよと付き合つてよ」

とは、言ったものの流星に使い慣れてない砂鉄で守鶴の防御を掻い潜り、攻撃を与え

るのは今のところかなり厳しい。砂を使えればと……考えてしまおうが、それではわざわざ守鶴に相手をしてもらう実践の意味がない。

なので、日が暮れ辺りが暗くなってくるまで俺は守鶴と修行を続けた。

『なあ………もういいんじゃないか？』

「ま………まだ、もう………ちよと………お願い」

『つても、お前息切れ切れでチャクラも殆どねえーだろ』

砂を使わないで戦った為、体にわりと切り傷が出来てしまった。だが、人柱力持ち前の回復能力で多分寝れば治るだろう。だと言うのに守鶴はもう、止めようと言ってくる。

もう、守鶴さんは心配症だなあー、と茶化そうと声を出そうと思ったが出た言葉は違った。

「へ、平気………平気………全然大丈夫………夫………」

『……お前——』

ん？何だか守鶴が霞んで見えてきた。声も聞こえるが頭に入つて来ない。手足も震えて、凄く疲れている気がする。

あれ？もしかして俺、結構ヤバい……？

そう、認識したら体が前に倒れ、目を見開いた守鶴が途切れかけの意識の中見えた。

五塵〜守鶴心、我知らず〜

——何で、そこまでする必要があんつだよ……………。

俺様はアイツが産まれた時から知っている。凡そ、アイツの親や兄弟よりも、長く長く側にいる。まあ、忌々しい封印術のせいで離れられねえと言った方が適切だが、これでもアイツの事は分かっているつもりだった。

いや、知ろうとして知った訳ではなく半強制的にアイツを俺様は知った。じゃなければ、大嫌いな人間なんぞの事を進んで知りたいと何って思うかよ。

俺様は人間が大嫌いだ。

そこに例外は無い、比較的口を聞いてやった奴もいるが、それまでだ。大嫌いな事に変わりはねえ。大体、俺様を封印した人間を好きになれと、言う方が可笑しい。ここから出ることが出来たなら、暴れまわって、食い殺して、絶望と俺様を封印した事を人間どもに後悔させてやる。これは決定事項だ。変える気なんて微塵もねえ。

それで、アイツは人柱力。影でこそ泣いては、俺様の力を扱えず人を傷つけてし

まったく、また泣くクソ餓鬼。それが、世話役の男に裏切れて殺されかけて、今までの人柱力のように人を憎むようになったと思つた。思つたが、裏切れたシヨツクで暴走したその次の日アイツは……

『やあ、守鶴さん。こんにちは、今日はいい天気だね』

いよいよ、頭がイカれたか？と俺様は思つた。会えば怖がり泣きじやくつていた、筈のヤツが次の日はヘラつした態度で挨拶してきやがつた。どんな心変わりをしてもこゝうは成らねえだろう。

だが、まあいい。どうせ、無視しとけば直ぐに失せる。そう、俺様は考えたので関わると狸寝入りをしたが、アイツは……

『守鶴さん、暇なのでしりとりをしよう！』

『……………』

『守鶴さん、今日雨が降つたんだよ！凄いいね！お陰でビシヨビシヨになつたちやつたよ』

『……………』

『守鶴たん、今日父様にメツチャ睨まれたよ』

『……………』

答える気が無いことがアイツには分からねえのか？何回も何回も話しかけてウゼエが、答えてやるのも癪で返答してやる気なつてなかつた。

だが、ちよと待つて……

『誰が「たん」だ！気色悪い事言つてんじやねえー!!殺すぞ、餓鬼!!』

と、思わず反応してしまった。だが、この俺様をふざけた呼び方で呼ぶヤツをそのまま流してやる程俺様はお優しくない。だから、アイツが恐怖し泣き震えるように睨みつけてやった。

これで、アイツも大人しく引き下がるだろうと……だと言うのに、無表情の癖に『やつと話してくれた』と嬉しそうにしゃがったんだ。

何だコイツは……本当に頭のネジが飛んでやがる。

それから、アイツは性懲りもなく毎日毎日俺様の所に来る。意味がわかんねえ、俺様を怖がるでもなく話しかけてくるアイツの考えが読めねえ。俺様に取り入って利用しようとしてっんのか？

『利用?……ツ、クツハハハ!何それ!俺が君を利用!?!無理無理、出来っこないって!クツフフ……守鶴たん、冗談上手いね!あー、お腹痛い痛い。フツフフ……』

真底可笑しげにアイツは鉄仮面を崩し、地面を叩き踞つて肩を震わせ笑った。何だその笑い方はと思うよりも、俺様の思考は水を浴びせられた様に固まった。

とても嘘を言っている様には見えねえ、ならコイツは何故俺様に関わろうとする。利用する気もなく、俺様に話しかけて何になる。

『クソ餓鬼……テメエ何で俺様に話しかけてくる』

『ん？何でって……そんなの決まってるじゃないか』

【君】と【友達】に成りたいからだよ、守鶴。アイツはまるで当然とばかりに俺様にそう言った。

本当、心底可笑しい、馬鹿げてる、何で人間のお前が俺様と言葉が喉の奥で溢れで出そうになったが出たか言葉は……

『お前、本当にそう思ってるのかよ……』

『無論さあ、じゃなければ俺の貴重な睡眠時間を削ってまでここに来ないって』

貴重と言う割には普段寝まくってるだろ、と言いたい俺様は一言、「そうかよ」と言った。それ以上言葉が出てこなかったからだ。

何だよ、俺様、ほだされてんじやねえか？馬鹿だろ、相手はあの憎い人間だぜ？餓鬼の戯れ言だ構うことはねえだろ？ああ、そうだその筈だろ？

そう自身に問いかけては自問自答を繰り返す間も、アイツは性懲りもなく俺様に毎日飽きもせずくだらねえ事を話しかけてくる。

「空が青いねえ、絶好の昼寝日和だと思わないかい？」

『知るか、昨日もそう言ってたじゃねえか』

「昨日は昨日、今日は今日の眠気が訪れると、よく言うじゃないか」

『言わねえーよ』

ハッ、めんどくせえ、何でこの俺様がこんな餓鬼の言葉に振り回されねえといけねえんだ。もう知るかよ、勝手にしろ。暇潰しだ、そうだコイツは暇潰しだ。

胸糞わりい、封印が破れるまでの、暇潰しに話をしてやる。有り難く思いやがれ、クソ餓鬼。この俺様が話相手になってやる。

と、俺様にこう思わせるクソ生意気な理解出来ねえ餓鬼だが、もつと理解出来ねえのがアイツの修業方だ。チャクラが切れてぶっ倒れるまで、何らかの修業をしている。俺様がいてもとから多い人柱力のチャクラが枯渇するまでだ。

拳げ句には、自身の分身とはいえ俺様に体に乗っ取られる事を許しやがった。一周回ってコイツ、馬鹿なんじゃ無いかと最近思う様になった。

『お前、馬鹿だ、馬鹿』

「えっ？急に何？……まあ、そんなに頭良いとは思ってないけど……」
『チツ』

「何で、舌打ち!?俺何か君の気に障ることしたかい？」

あー、うるせえ。何で、ソコまでして強く成ろうとすんだよ。俺様の砂があればお前が傷付く事なんかねえーだろが。なのに、いつ暗殺者が来るか分からねえ状況で、フラフラになってまで修業するか？

馬鹿以外に言いようがねえ。料理を作るのを条件に修業手伝ってやったのに、ぶっ倒れやかつて。俺様、料理何か出来ねえぞ。……クソ……仕方ねえから、起きるまでは守つてやるが、勘違いすんじゃないやねえぞ。あくまで飯の為だ、テメエの為何かじゃ微塵もねえからな。

だから——さつさと目を覚ませよ。我愛羅。